

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：16401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18651

研究課題名（和文）大学における担任・アドバイザー等の学生支援の学術的検証と支援モデルの開発

研究課題名（英文）Academic examination of homeroom teachers, advisors, and other student support services at universities and development of support models

研究代表者

杉田 郁代（Sugita, Ikuyo）

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：90469320

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大学教育において手探りで行われている担任・アドバイザーによる学生支援について実態を行い明らかにするとともに、それを基に、担任・アドバイザーによる学生支援モデルの開発と相談に必要な支援を体系化するものである。研究成果としては、組織を対象とした調査と担任・アドバイザーを対象に行った調査によって、大学における担任・アドバイザー等の行う学生支援について明らかにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、大学では中途退学や休学する学生に対する学生相談、発達障害の学生に対する修学支援は専門家による支援が実施され、学術的研究も進展している。しかし、そこに至るまでの支援は、担任・アドバイザーと呼ばれる教員が、学生支援にあっている。担任・アドバイザーの行う学生支援は、殆ど検証されてこなかった。本研究の意義は、次の2点である。上記の検証するため、組織を対象とした調査と担任・アドバイザーを対象に調査を実施したこと、これを通じて大学における担任・アドバイザー等の行う学生支援について明らかにしたことである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the actual situation of student support provided by homeroom teachers and advisors, which is still being explored in university education, and to develop a model of student support by homeroom teachers and advisors and systematize the support necessary for consultation based on this reality. The results of this research were a survey of organizations and a survey of homeroom teachers and advisors to clarify the student support provided by homeroom teachers, advisors, and others at universities.

研究分野：高等教育開発

キーワード：学生支援 クラス担任制 クラス担任・アドバイザー 学生相談

1. 研究開始当初の背景

近年、大学に入学してくる学生の多様化を受け、中途退学や休学する学生への対応が大学教育において喫緊の課題とされている。中途退学や休学する学生に対する学生相談、発達障害の学生への修学支援は専門家による支援が導入され、学術的研究も進展している。しかし、専門家の支援に至るまでの学生に対する支援は、相談支援を専門としない担任・アドバイザーと呼ばれる大学教員が担っていると考えられる。たとえば、大学の公式ホームページを確認すると、一部の大学では、担任制度を設置して学生に対する面倒見の良さを掲げている。つまり、相談支援を専門としない担任・アドバイザーと呼ばれる大学教員は、日常的に学生に対する支援を行っていることが推察される。

ただし、担任・アドバイザー教員は、どのような学生支援を担っているのか、その取り巻く環境はどのような状況なのか、求められるスキルはどのようなものか、どのような効果があるのかなどについて、担任・アドバイザー教員による学生支援の知見は、十分に把握され検討されているとは言い難い。よって、本研究ではこの課題に取り組み担任・アドバイザーの行う学生支援の実態について明らかにすることとした。

2. 研究の目的

多様化する学生の入学に伴い、中途退学、休学するなどの学生に対応するための方策として、担任・アドバイザーと呼ばれる相談支援を専門としない教員を配置して行う学生支援がある。本研究の目的は、担任・アドバイザーと呼ばれる相談支援を専門としない教員が行う学生支援について検証すること、担任・アドバイザーによる学生支援モデルの開発と相談に必要な支援を体系化するものである。

目的を達成するため、と の調査を実施し、～ の課題を設定し取り組んだ。

ホームページ上に、クラス担任制度を実施しているとホームページに記載されている大学(短期大学を含む)82校(短期大学:13校)の学生支援の責任者を対象とする調査の実施

大学教育において担任・アドバイザーを担う大学教員を対象とする調査の実施

本研究は、上記のと の調査を実施することにより、～ について検討し、担任・アドバイザーによる学生支援の実態を明らかにする。

担任・アドバイザーによる学生支援の実態の検討

担任・アドバイザーによる学生支援を取り巻く環境の検討

担任・アドバイザーによる学生支援の効果の検討

担任・アドバイザーによる学生支援の課題の検討

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、下記の方法により研究を行った。

上記の～ について、大学組織において学生支援の責任者と担任・アドバイザーを担う大学教員を対象に、質問紙調査を実施した。対象者の選択にあたっては、大学の公式ホームページにクラス担任制度を実施していると記載する大学(短期大学を含む)82校((国立:4校,公立:3校,私立:75校,大学:69校,短期大学:13校)を対象とし、調査協力を依頼した。また、調査年度に担任・アドバイザーを担う大学教員を対象に、インターネット調査会社を通じて、質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

4.1 担任・アドバイザーを取り巻く環境

大学の公式ホームページにクラス担任制度を実施していると記載する大学の学生支援の責任者18名、担任・アドバイザーを担う大学教員52名より回答を得ることができた。また、調査年度(2021年度)に担任・アドバイザーを務める教員196名(男性163名、女性33名)に対する質問紙調査から得られた知見は、下記のとおりである。第一に、担任・アドバイザーが受け持つ学生数は、大学組織によって異なる結果であった。具体的には、学生支援の責任者を対象にした調査結果では、一クラスの学生数は10~20人未満(27.8%)が最も多くみられた。一方、担任・アドバイザーの調査結果によると、平均値34.5人、中央値25.0人、最頻値10.0人であった。平均値が中央値を大きく上回るのは、中央値を大きく超える多数の学生数を担任するケースが少なくないことが推察される。

第二に、クラス担任制度を支える研修体制の脆弱さである。学生支援の責任者を対象に調査結果では、クラス担任マニュアルを整備しているとの回答は、27.8%であり、整備していないとの回答は72.2%であった。次に、研修会の実施状況は実施しているとの回答が、16.7%で、実施していないのは、77.8%であった。一方、担任・アドバイザーを対象とする調査結果によると、クラス担任マニュアルが整備されているのは19.4%、クラス担任に役立つ研修会が開催されているのは、41.8%であった。よって、2つの調査の結果は、類似の傾向が確認された。つまり、担任・アドバイザーの担う業務を支える担任マニュアルや研修会の実施はなどの研修体制の脆弱性が考えられる。

以上のことから、担任・アドバイザーを取り巻く環境は、大学組織によって異なることが考えられる。今後は、組織による制度の違いを考慮して検討する必要がある。

4.2 担任・アドバイザーの効果について

クラス担任制度の効果について、学生支援の責任者を対象にした調査結果では、自由記述で効果を尋ねたところ、一人一人の学生の情報理解、指導・支援、相談対応、問題行動の早期発見と早期ケアに一定の効果を奏していることなどが確認できた。一方、担任・アドバイザーを対象とした調査では、「学生の理解に役立つ」、「学生の人間力・人間的成長向上に役立つ」、「学生のキャリア・就職支援に役立つ」、「国家試験がある場合、試験合格に役立つ」、「教員（クラス担任）の教育活動（授業・実習等に役立つ）」が確認された。具体的には、担任・アドバイザーとして相談支援頻度が高い教員は、先述の5点について相談支援頻度が低い教員と比較して有意差が確認できた。以上のことから、クラス担任制度は、大学が行う学生支援として、一定の効果があることが考えられる。

4.3 担任・アドバイザーに求められる力量について

担任・アドバイザーを対象とした調査において、「クラス担任」に求められる力量について確認したところ、「授業時にクラスの学生の様子を確認する観察力」、「担任側から学生に、積極的なコミュニケーションをとる力」、「他の部署との連携力」、「クラス・ホームルーム活動等のクラス運営力」の4つの力量について得点が有意に高く、求められる力量と捉えていることが窺える。一方、2021年に実施した調査においてクラス担任に求められるスキルについて自由記述で回答を求めたところ、1位は、「コミュニケーション(n=41)」、2位は「指導(n=40)」、3位は、「傾聴・聞く(n=21)」、「把握(n=16)」、「理解(n=16)」、4位は「相談(n=15)」、「忍耐(n=15)」、5位は、「対応(n=13)」、6位は「観察(n=11)」の順位であった。これらの調査結果から、担任・アドバイザーに求められる力量は、学生に対するコミュニケーション力、学生を観察して、把握、理解する力が求められると考えられる。

4.4 クラス担任制の課題

担任・アドバイザーを対象とした調査において、「クラス担任」の課題について自由記述による回答を求めた。その結果を、KJ法とKH-Corderを用いて分析した。その結果から、【クラス担任制にかかる課題】【クラス担任による学生対応にかかる課題】【多様な学生への対応にかかる課題】の3つを実態として抽出することができた。これらは順に、(i)【クラス担任制の運用に関する課題】、(ii)【クラス担任制の中で行われている学生相談に関する課題】、(iii)【教員・務系職員・カウンセラーの連携・協働に関する課題】を示唆しており、(i)に属する「学生対応の時間確保・所要時間の問題」「クラス担任制を含む学内のすべての学生支援組織・取組を大学が統括し、連携・協働を促進する体制の未整備」「担任選考基準の未整備」、(iii)に属する「大学教育の範疇という基準のわかりにくさ」が、クラス担任制を超えて教職員による学生相談に普遍的な問題であることを明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 杉田 郁代 ・ 坂本 智香 ・ 藤本 正己	4. 巻 2
2. 論文標題 大学教育におけるクラス担任制の課題 クラス担任へのアンケート調査結果から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 高等教育開発	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 杉田郁代	4. 巻 18
2. 論文標題 学教育におけるクラス担任制度の実態と課題について 相談支援の頻度が高い教員に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 杉田郁代	4. 巻 24
2. 論文標題 大学教育におけるクラス担任制度の現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知大学教育研究論集	6. 最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉田郁代
2. 発表標題 コロナ禍におけるクラス担任による学生支援の実態
3. 学会等名 第16回大学教育カンファレンス i n 徳島
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉田郁代
2. 発表標題 大学教育におけるクラス担任の学生支援学生相談Tipsの開発にむけた実証的研究
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉田郁代
2. 発表標題 大学教育におけるクラス担任制度の実態調査から
3. 学会等名 大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤本 正己 (Fujimoto masami)		
研究協力者	坂本 智香 (SAKAMOTO CHIKA)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------